

令和三年度 東京純心大学 現代文化学部 こども文化学科

特別選抜試験（第二回）

【小論文】 試験問題

試験時間 90分

注意事項

- ・ 解答は、解答用紙に記入すること
- ・ 問題用紙及び下書用紙も、試験終了後回収する

受験番号

令和2年12月13日

以下の文を読み、設問に答えなさい。

(前略)

自分の考えを語れるようになるには、どうすればいいのか。

そのために何より大切なのは、「他者に対して語る」ということと、そして「語ってから考える」ことである。

ここで言う「他者」は、「世間」や「常識」のような茫洋ぼうやうとした抽象的な存在でも、姿が見えない匿名的な「誰か」でもない。目の前にいる具体的な、生身の他者である。しかもそれは、気をつかって合わせたり、自分の思いを抑えつけたりしないといけないような他人ではなく、気兼ねなく対等に話せる相手でなければならない。

このような語りは、哲学対話でこそ可能になる。相手が目の前にいて聞いてくれないで私たちは、自分の考えをきちんと言葉にして伝えようという気持ちになる。しかもそこでは、誰かに評価されたり否定的な態度をとられたりすることがないので、他の人の意向や考えを忖度して話さなくてもいい。自分が考えたことをそのまま語るができる。

最初からうまく話せなくてもいい。無理やり話すこともない。とりあえずは黙って考えているだけでもいい。それでも、自分の考えを形にするために、いつかどこかで話してみることが大切だ。だから、とにかく言葉を口に出してみる。

一般には「よく考えてから話す」のがいいと言われるが、そんなことをしていたら、語れるようにはならない。哲学対話の第一のルールにある通り、「何を言ってもいい」のである。だからとりあえず話す。考えずに話してもいい。話しながら考えてもいい。もっと言えば、基本的には、話して、から考えればいいのだ。

いざ話してみると、そこから思考が言葉に導かれ、つながっていくことが多い。対話に参加している他の人が言葉を拾ってつないでくれて、ぴったりの言葉を見つけてくれることもある。もちろん自分の中で言葉を探し、選び、それからしゃべってもいい。

いずれにせよ、哲学対話ではちゃんと話さないといけないという思いには、あまりとらわれないほうがいい。まずは話すこと、そこから始めればいい。そうして対話をしながら、他の人といっしょに言葉を見つけ、他の人から言葉を受け取り、自分の考えを伝える言葉を増やしていく。そうやって回数を重ねれば、誰でも自分の考えを語れるようになる。

※注

筆者は「哲学対話」について、同書の「はじめに」において以下のように述べている。

「哲学対話というのは、本書で詳しく説明するが、5人から20人くらいで輪になって座り、一つのテーマについて、自由に話をしながら、いっしょに考えていくというものだ。

私ははじめて見たのは、2012年の夏、ハワイにおいてであった。「子どものための哲学(Philosophy for Children)」というのを実践している現地の高校と小学校の授業に参加する機会に恵まれた。その時、子どもたちが真剣に考えながらも、うれしそうに笑っている様子を見て、何とも晴れやかな衝撃を受けた。そうだ、考えることは、一人でやっても楽しいけど、こうやってみんなでやれば、もっと楽しいんだ！ だったら対話の場を作ればいい！

そういうわけで、以来いろんなところで哲学対話を行ってきた。」

設問

「自分の考えを語れるようになるには、どうすればいいのか。」という冒頭の「問い」に対する筆者の「答え」を文中のキーワードを用いながら簡潔に記しなさい。その上で、自分の考えを語る力を高めるためにどのようにすべきか、あなたの考えを記しなさい。その際、筆者の考えと比較したり、具体例を出したりしながら、説得力のある文章になるように工夫すること。(六〇〇字〜八〇〇字)